

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第7号

平成27年4月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

# 楠木正成の誠忠全功を尽くして余いなし

湊川神社「大楠公御碑銘賛」 銘 徳川光圀 賛 朱舜水

正行の父、正成を祀る神戸湊川神社の境内に楠木正成墓碑が建っている。この墓碑は、元禄5年(1692)、徳川光圀がその偉業をたたえ、自筆による「嗚呼忠臣楠子之墓」を刻んだもの。

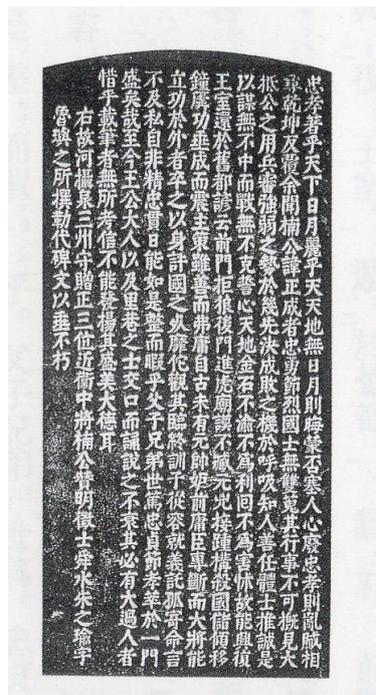
そして、この裏面には、明の遺臣朱舜水が作った賛文が、岡村元春の書によって刻まれている。湊川神社発行の「大楠公御碑銘賛」の解説文には、吉田松陰がこの拓本を松下村塾に掲げて志士の教育に当たった、と記している。

3月7日に開かれた四條畷市主催「楠正行シンポジウム(第3回)」で講師を勤められた初田弘枝氏がこの碑銘賛の拓本をお持ちになり、読み方、そして解説をされたが、大変感銘を受けた。以下の三文はいずれも湊川神社発行の大楠公御碑銘賛からの転載である。

## 大楠公御賛碑

忠孝著乎天下、日月麗乎天。天地無日月、則晦蒙否塞、人心癡忠孝、則亂賊相尋、乾坤反覆。余聞、楠公譚正成者、忠勇節烈、國士無雙。菟其打事、不可概見。大抵公之用兵、審強弱之勢於幾先、決成敗之機於呼吸。知人善任、體士推誠。是以謀無不中、而戰無不克。誓心天地、金石不瀧渝。不為利回、不為害怵。故能興復王室、還於舊都。諺云、前門拒狼、後門進虎。廟謨不臧、元兇接踵、構殺國儲、傾移鐘簴。功垂成而震主。策雖善而弗庸。自古未有元帥妒前、庸臣專斷、而大將能立功於外者。卒之以身許國、之歿靡佗。觀其臨終訓子、從容就義託孤寄命、言不及私。自非精忠貫日、能如是整而暇乎。父子兄弟、世篤忠貞、節孝萃於一門。盛矣哉。至今王公大人、以及里巷之士、交口而誦說之不衰、其必有大過人者。惜乎、載筆者無所考信、不能發揚其盛美大德耳。

右故河攝泉三州守、贈正三位近衛中将楠公贊、明徴士 舜水朱之喩字魯嶼之所撰。勒代碑文、以垂らす垂不朽。



## 大楠公御碑賛 読み方

忠孝は天下に著き、日月は天に麗く。天地日月無ければ、則ち晦蒙否塞し、人心忠孝を癡すれば、則ち乱賊相尋ぎ、乾坤反覆す。余聞く、楠公譚は正成、忠勇節烈、國士無雙なりと。其の行事を菟むるに、概見すべからず。大抵公の兵を用ふるや、強弱の勢を幾先に審かにし、成敗の機を呼吸に決す。人を知りて善く任じ、士を

體して誠を推す。

是を以て謀中らざるなく、而して戦克たざるなし。心を天地に誓ひ、金石渝らず。利の為に回はず、害の為に怵れず。故に能く王室を興復して、舊都に還す。諺に云ふ、前門に狼を拒ぎ、後門に虎を進むと。廟謨臧からず。元兇を踵を接し、國儲を構殺して、鐘簴を傾移す。

功成るに垂んとして主を震す。策善しと雖も而も庸ひられず。古より未だ元帥前を炉み、庸臣專斷して、大將能く功を外に立つる者有らず。之を卒ふるに身を以て國に許し、歿に之くに靡佗し。其の終りに臨み子

を訓ふるを觀るに、從容として義に就き孤に託し命を寄するに、言私に及ばず。精忠日を貫くに非るよりは、能く是の如く整ひて暇あらんや。父子兄弟、世々忠貞に篤く、節孝一門に萃まる。盛なる哉。

今に至るも王公大人より、以て里巷の土に及ぶまで、口を交へて誦説して之れ衰へざるは、其れ必ず大いに人に過ぐる者有らん。惜しきかな、筆に載する者孝信する所なく、其の盛美大徳を發揚する能はざるのみ。右は故の河内泉三州の守、贈正三位近衛の中將楠公の贊、明の徵士舜水朱之諭字は魯嶼の撰する所なり。勒して碑文に代へ、以て不朽に垂る。

### 大楠公御碑贊 略解

忠孝は天下についたものだから、改めて声高に忠孝を説く必要はない。忠孝をつくすことは人間にとって当然なことであり、自然なことなのである。それは日月が天について万物を照らし育ててゐるのと同様だからである。

それ故、天地に日月がなければ、真暗で動きのとれない塞がった状態になり、人心から忠孝を廃すれば、乱臣賊子が相尋いで起こり、国家世界は遂には顛覆してしまふのである。

自分は聞いてゐる。楠公、名は正成といふ人は、忠勇節烈で、国中で比べる者がいない程のすぐれた人物であると。然しその楠公の行った偉大な事柄を集めてみても、その多くは埋もれて梗概すら判明しないのである。

その楠公の用兵の方法は、大体、敵、味方の強弱の状態を戦ひの前に細かく調べ、勝敗については機微の間の、ほんの一呼吸に決するといふ、まさに戦ひの妙に長けてゐたのである。

それに人物の性格や能力を知って処遇し、有能の士を信任し誠意をもって事に当られた。そのために、計略は尽く的中し、戦争は必ず勝利を得ることが出来たのである。従つて楠公は天地神明に誓つて行動し、金や石の堅きが如く変心することがなかつた。又、利益によつても左右されず、威力によつて脅かしても懼れて避けようとしなかつた。

そのためによく皇室を復興して後醍醐天皇を京都にお還し申すことが出来たのである。然し「前門に狼を拒ぎ、後門に虎を進む」といふ諺がある。つまり、前に北条高時を亡ぼしたが、それが又、足利尊氏の専横を招くことにもなつたのである。

この大切な時に、朝廷の施政が不適切であつた為に悪人が次々に起こり、遂には皇太子である護良親王を無実の罪で弑し奉り、皇位を傾け移すが如き大逆を敢へてしたのである。

この時、楠公の計画は殆ど成功に近づいてゐたが、その功績が盛んであるため、後醍醐天皇に不安の気持ちを抱かせ申したのである。かかる場合には、たとへ

その獻策が良くても採用されぬものである。昔から一番偉い人が、部下の功を妬んで妨害し、又、愚臣が勝手に権力を振ふ状態では、どんな有能な武将でも外で勝利を得るといふ事は、今日までありえないのである。

(コレハ、足利尊氏が九州カラ攻メ上ツタ時、後醍醐天皇二比叡山二行幸ヲ願ヒ、敵ヲ京都二誘ヒ込ミ周リカラ攻メテ壊滅サセルトイフ楠公ノ計略が、藤原清忠ニヨリ阻止サレ、為メニ正成ハ湊川二出陣シテ尊氏ト戦ツテ討死スルトイフ史実ヲサシテキル。)

とどのつまりは、自分の一身を国に捧げ、わが身を、国家の為に犠牲となる以外の、二心を抱くが如きことは、なさらなかつた。その死を覚悟して、我が子の正行に教へられるところをみると、從容として大義に就き、その遺命をみると、一家の私事に及ぶことなく、すべて国の事のみであつた。

その精忠が太陽にまで到達するやうな大節の人でなければ、討死することがわかつてゐながら、整然として取り乱さず悠揚迫らない態度を保つ事は出来ない筈である。

これは楠公だけでなく、親も子も兄弟も代々忠貞の志に篤く、忠義と孝節は尽くこの一門に集つてゐる。ああ、誠に盛なことである。あの昔から今日に至るまで、上は皇室から身分高き人々、下は一般庶民まで、皆口々に楠公の事を賞讃するところからみると、これは、楠公とその一門が、人々よりすぐれてゐたからであらう。然るに残念な事は、筆に載する記録なるものが、証拠によつて確かめる確実なものがない為に、楠公の盛美と大徳を賞揚するが出来ないといふ事である。



右はもとの河内、摂津、和泉三国の太守、贈正三位近衛の中將楠公の贊である。

これは明の学徳高き人で号は舜水、名は之諭、字は魯嶼の撰文である。それを碑文に代用して石に刻み、

後世に残す。

(写真は「楠木正成墓碑」湊川神社境内)

#### \* 朱舜水 (1600~1682)

明の儒学者。中国で、清朝に滅ぼされた明朝の再興運動に参画するが、1659年、その再興運動をあきらめ日本の長崎に亡命。1665年、徳川光圀の招聘によつて江戸に移住し、大日本史編纂や水戸学に影響を与えた。

朱舜水は、狩野探幽の桜井訣別図に画贊を書くため、安東省菴に楠公の伝を書かせ、これを百読することで、自らも熱烈な楠公崇拜者となつた。後に、朱舜水の文集に収められていたこの名文が碑贊に採用された。(湊川神社「大楠公御碑」解説より)

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)